

名詞修飾表現から見たモダリティ

益岡隆志（関西外国語大学）

本発表が依拠するモダリティの見方は「階層構成的モダリティ」と称する見方である。階層構成的モダリティの見方とは、文を命題（事態を表す部分）とモダリティ（話し手の態度を表す部分）という2つの部分で構成されるものと見たうえで、モダリティの内部に2つの階層が認められるとするものである。上位にある「発話のモダリティの階層」（発話の場が開かれ談話との接点を有する領域）とその下位にある「判断のモダリティの階層」（発話の場から独立した判断認識の領域）という2つの階層がそれである。この階層構成的モダリティの見方のもとで、本発表では日本語を対象に名詞修飾節構文（「修飾部＋主名詞」の構文）の修飾部にモダリティがどのように関わるかを考察する。

その考察において本発表が着目するのは名詞修飾節構文における接続形式（修飾部と主名詞を接続する形式）である。接続形式に着目するとき、日本語の名詞修飾節構文には「基本型」と「引用系接続型」という2つの異なるタイプが見出される。「基本型」とは、有形の接続形式を持たない「あなたをだました人」のような名詞修飾節構文のことであり、「引用系接続型」とは、引用辞「ト」を含む「トノ」・「トイウ」を接続形式とする「岬に行ってみないか {との/という} 誘い」のような名詞修飾節構文のことである。修飾部におけるモダリティの関与の有無は、このような基本型と引用系接続型の区別に深く関係する。すなわち、基本型の修飾部が命題をデフォルトとするのに対して、引用系接続型の修飾部にはモダリティが関与し得る。引用系接続型の修飾部にモダリティが関与し得るのは、修飾部が引用辞の介在により主節から独立し、主節と同じようにモダリティの関与を許容するからである。

日本語の基本型と引用系接続型の区別に基づくこの分析結果を対照研究の観点から検討することは可能であろうか。その可能性をめぐって、本発表では（i）基本型と引用系接続型の区別またはそれに類する区別は他言語にも存在するのか、（ii）引用系接続型とは異なる方式により修飾部の独立を可能にする言語はあるのか、という2つの課題を取り上げ、若干の事例を紹介する。